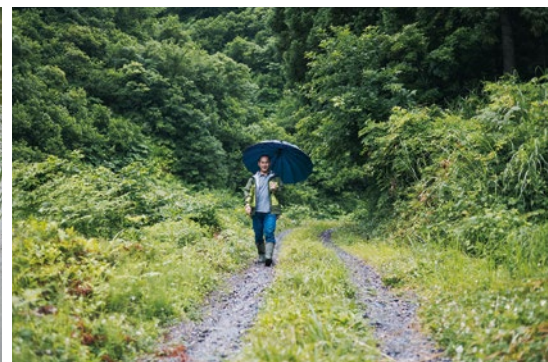




集落で受け入れている
大学との10年間の軌跡
を集めたフォトブック



03
INTERVIEW

地域おこし協力隊を 通して身につけた 「生きる力」

あだち ともひこ
足立 知彦さん

昭和51年、東京生まれ。介護職・支援学級の支援員を経て、2004年に日本一周の旅の途中で中越大地震に遭遇。震災ボランティアを通して南魚沼周辺の地域に通うようになる。2016年1月に南魚沼市辻又集落の地域おこし協力隊に着任。任期終了後は、不登校や引きこもりといわれる人の支援員として働きながら集落で暮らす。

中越大地震が繋いだ縁を頼りに

国道17号を上越新幹線「浦佐駅」方面へ向かう途中、県道58号線に入り、さらに道を折れ林道を進むと、ヤゴ平林道（※1）がある。霊峰八海山を望み、眼前に雲海の広がる絶景が多くの人々を惹きつけるスポットだ。その山裾に辻又集落はある。冬には道が雪で閉ざされてしまうほどの豪雪地に14世帯が暮らす。「学生の頃から災害ボランティアによく参加していて、大学卒業後も、介護職や支援学級の支援員といったソーシャルワーカーの道に進みました。その後、日本一周の旅をしていた時に、中越大地震に遭遇しました。それがきっかけで、この地域にはボランティアで通うようになったのですが、次第に自分のソーシャルワーカーとしての経験や知識でお世話になった人に恩返ししたいと思うようになり、地域おこし協力隊になることを決めました」

足立さんは、耕作放棄地が増え、農業の担い手が減少している辻又集落の支援のために、2016年に地域おこし協力隊に着任。集落内の空き家を借り、その空き家を自分で直しながら暮らしを始めた。「最初の1年間は『住む』ことで精一杯でした。中山間地の暮らしは簡単なものではなく、集落の方々に助けられながら暮らしに慣れていきました。」

“任期が終わる3年後には、いなくなる”

地域おこし協力隊として、辻又集落に移住した足立さんは、「きっと地域の人からはそう思われていただろう」と当時を振り返る。集落の空き家を直しながら、斜面沿いの水田で米づくりをして、南魚沼市での生活は9年目になった。「南魚沼市に来て良かった」と話す足立さんの辿ってきた定住までの道を聞く。



地域おこし協力隊とは

過疎地や人口減少が著しい地域に都市部から移住した外部人材が、それぞれの地域で求められていることを仕事として行う制度。地域おこし協力隊は市から委嘱を受けて活動を行い、仕事の内容は農業支援や商品開発・PR等、多種多様。最大3年間の活動期間で課題解決の仕組みづくりと隊員の定住を目指す。

小さな積み重ねが人を受け入れる土壌をつくる

地域おこし協力隊の任期を終え、足立さんは辻又集落に住み続けることを選んだ。朝には鳥がさえずり、生き物の存在を感じる山や自然と共に暮らす。集落で暮らす人々は減っていくが、それでも住み続けられるうちはここに居たい。そんな想いを持ち続け、辻又集落での生活は2024年で9年目を迎えた。

「集落の方から、農作業をしていたら声をかけてもらえるようになったり、トラクターや米の乾燥機も集落の人と共同で使わせてもらったりと、最初はよそ者だった自分が、この8年で少しずつ集落に受け入れられていったように感じています。私も集落で受け入れている大学生のサポートや交流事業の手伝いをして、1人の集落の住民として一緒に生活をしている。そんな感覚ですね」

地域おこし協力隊という立場からは見えなかった辻又集落の本来の姿。定住を決めたから分かることも多かった。

あったり、任される仕事の内容であったり、とても小さな変化でした。それでも目には見えない範囲で少しずつ変化しているんです。その変化が積み重なることで、「よそ者」を受け入れる土壌ができていくのだと思います」

人との関わり、地域との関わり、ミッションとの向き合い方、豪雪地での暮らし。今でこそ、多様なサポート体制や地域の理解も生まれているが、黎明期を過ごした足立さんは特に苦労も多かっただろう。それでも、南魚沼市に移住をして良かったと足立さんは話す。

「今は楽しく暮らせていますよ。趣味だったバイクは雪の中では乗れないのでマニュアルの軽トラに乗り換えました。これが中々楽しいんですよ。あと、東京から来た友人に自分の田んぼで収穫した米をあげると、とても喜んでくれるので、自分で食べ物をつくっているんだという自信がきましたね」

足立さんが農業や化学肥料をできるだけ使わずに作った米は、特にアトピーやアレルギー

を気にする親に人気で、普段お米をあまり食べない子どもも食べられるようになったと声が届く。農家と言えるほどではないが、集落で暮らすための生業として足立さんは米づくりを続けている。

「辻又集落で暮らすうちに、どの山菜が食べられるのか分かるようになったり、猪に畑を荒らされれば狩猟免許を取得したり。この中山間地で「生きる力」が芽生えてきました。地域から地域おこし協力隊に寄せられる『集落を活性化して欲しい』という期待に応えるためには、自分自身が集落で生きる力を身につけて、暮らし続けることが大事なのだと思います」

眼前を白く覆い、朝日が差し込む雲海は特別で幻想的だ。雲が晴れ、盆地に連なる棚田もまた美しい。だが、高台を降り、その景色を支える人々と共に暮らすことで見える景色もある。地域おこし協力隊だったから、その景色に出会うことができた足立さん。生きる力は次の世代へ引き継がれ、営みは続いていく。

雨の中、田んぼの水の様子を確認しにいく足立さん。東京から訪ねてくる人と農業交流体験をする場所としても使っている。豪雪地が育む豊富な水資源を活かし、自分が食べる以上の米を作り、誰かと分かち合う。そうした喜びが暮らし甲斐に繋がっている。南魚沼市での地域おこし協力隊はR6.7月末現在5名が活躍している。足立さんが拓いた道が次世代へ引き継がれている。



©若井勝也



※1 ヤゴ平林道 東屋からの雲海

上越新幹線「浦佐駅」を背に西の山へと登るヤゴ平林道入り口を進んだ先にある六角型屋根の「東屋」。条件がそろえば安定的に雲海が観測できるため、風景カメラマンが集まるスポット。場所：南魚沼市浦佐